様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３４７８

研究課題名（和文）日・英語の補文内における主文現象に関する研究

研究課題名（英文）Main Clause Phenomena in Japanese and English Complement Clauses

研究代表者
吉本　圭佑（Yoshimoto, Keisuke）

龍谷大学・政策学部・准教授

研究者番号：９０７２４４７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、通常主文で起こる話題化等の主文現象が一部の補文において容認される（あるいはされない）のはなぜかについて、生成文法、特にカートグラフィーの枠組みで考察した。これまで、主文現象を認可する周縁部の構造が欠如しているとする切り詰め分析と、主文現象の移動が演算子の移動に干渉するとする干渉分析の２つが提案されてきたが、日本語の丁寧形の考察から、主文現象のタイプによっては複数の要因がその生起に関わっていること、演算子の移動が叙実節だけで起こるわけではないことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
生成文法の主たる目標は、人間の子どもがどのように母語を獲得するのかを生得仮説に基づき解明することである。子どもが一様に短期間で母語を獲得することを考えると、生まれつき脳内に言語獲得装置が備わっており、それがまわりで話されている言葉に刺激されて、臨界期までに個別文法へと変遷すると考えられている。カートグラフィー研究はこれまで節の周縁部の精緻な句構造を明らかにしてきたが、子どもが母語獲得の過程でそのように複雑な句構造の定型を学ぶとは考え難い。本研究では、節の周縁部で起こる主文現象を考察しながら、句構造の定型がより普遍的な局所性の原理に還元可能か否かを、主文現象や補文のタイプごとに検証した。

研究成果の概要（英文）：In this study I investigated why main clause phenomena, which standardly occur in main clauses, are allowed (or disallowed) to occur in a subset of embedded clauses. In the previous literature, there are two competing approaches to the unacceptability of embedded main clause phenomena. Those who advocate the truncation analysis argue that embedded main clause phenomena are so restrained due to the lack of the relevant projections in the clausal periphery. On the other hand, the advocates of the intervention analysis proposes that operator movement intervenes with main clause phenomena such as argument topicalization. I investigated the occurrences of the Japanese politeness marker, and suggested that its distribution is affected by multiple factors including clause sizes and operator movement. I also showed that operator movement is not necessarily contingent on 'factivity' in certain types of clauses.

研究分野：生成文法、統語論

キーワード：主文現象　カートグラフィー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

名詞句の前置は、生成文法における重要なテーマとして位置付けられてきたが、受動文における名詞句の前置等と比べ、話題化における名詞句の前置は、統語論が扱うべき現象というよりはむしろ語用論や意味論の対象とされる傾向があった（Hooper and Thompson 1973, Green 1976)。話題化による名詞句の前置等の主文現象が統語論の一般原理に従うことが示されたのはRizzi (1997)のイタリア語の分析であり、節（補文）の左端に現れる複数の要素に相対的な順序があることが発見された。これによると、左端の要素はそれぞれ特定の句構造を与えられ、左から順に Force>Topic>Focus>Topic>Finite というテンプレートが示す非対称的な並びであることがわかった。その後ヨーロッパを中心に盛んになったカートグラフィー研究では、左端の句構造の記述が進み、話題化等の主文現象を容認しない補文が一部の句構造を欠くとする切り詰め分析が提案されたが（Haegeman 2006)、なぜ要素間の順序がテンプレートのようになるのかという根本的な疑問は残されたままであった。

しかし、近年のアプローチでは、左端部のテンプレートをより一般的な統語規則から導き出そうとする試みがなされている。とりわけ本研究と関係が深いのは、空の演算子の移動と話題化による名詞句の前置が干渉しあうとする干渉分析（Haegeman 2012, Abels 2012)である。この分析のもとでは、(1)のように、話題化による名詞句の前置を容認しない補文において、発音されない演算子の移動があり、話題化が後者の移動を妨げる。これはちょうど、(2)のような関係節で、wh 演算子の移動が下線部の話題化要素によって妨げられるのと類似している。

(1) *John regrets [Op_i that <u>this movie</u> he has never seen t_i].
(2) *This is a student [to $whom_i$, <u>your book</u>, I would recommend t_i].

すなわち、干渉分析では、左端部のテンプレートは必要ではなく、左端の要素の出現可能性は、ある要素が同種の要素を飛び越えて前置できないという相対的最小性（Rizzi 1990, 2004)に帰着させられる。現段階ではどちらの分析が妥当なのか明確ではなく、様々な言語や主文現象のタイプを考察する必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、切り詰め分析と干渉分析のどちらが妥当か、英語と日本語における種々の主文現象や補文のタイプについて検証することである。

生成文法の主たる目標は、人間の子どもがどのように母語を獲得するのかを生得仮説に基づき解明することである。子どもが一様に短期間で母語を獲得することを考えると、生まれつき脳内に言語獲得装置が備わっており(Chomsky 1964)、それがまわりで話されている言葉に刺激されて、臨界期までに個別文法になると考えられている。カートグラフィー研究は左端部の精緻な句構造を明らかにしてきたが、子どもが母語獲得の過程で複雑な左端部のテンプレートを学ぶとは考え難い。もし説明的妥当性に則った母語獲得の仮説を立てるならば、より普遍的で経済的な原理によって左端部のテンプレートを説明できることが望ましい。

相対的最小性はこれまで人間言語の普遍的な原理であると考えられてきた概念であり、それにより左端部の句構造の相対的順序を説明することができれば、より説明的妥当性にかなった理論を構築することができる。本研究は、英語と日本語という系統の異なる言語の主文現象を考察し、以下の具体的な課題を解決することを目標とする。

(3) 干渉分析は主文現象の生起をどこまで予測し得るか
(4) 空の演算子の移動がある補文は共通した特性を持つか

３．研究の方法

仮説を検証するための例文を作成し、それをもとに母語話者の内省に基づく容認性判断テストを行った。得られたテスト結果によって、当該の仮説が成り立つかどうかを検証し、仮説をより洗練されたものにしていった。

具体的には、初年度には目的(3)を遂行するために、日本語の丁寧形「ます」の分布について考察した。二年次は英語に分析を移し、(4)の目的を遂行するために、Hooper and Thompson (1973)の補文の分類中のタイプ C の補文について考察した。最終年度には、(3)の目的を遂行するために、英語の左方転移構文の分析を行った。英語の左方転移構文の実験については、クラウドソーシングサービス Amazon Mechanical Turk (MTurk)上で 113 人の英語母語話者の被験者を募り、実験プラットフォーム・ウェブサイト Ibex Farm で 7 件法のリッカート尺度による容認性判断テストを行い、結果を R で分析した。

研究成果は、国内外における学会や研究会を通じて、あるいは論文等の形にまとめて公刊し、広く社会に発信した。

４．研究成果

（１）日本語の丁寧形「ます」の分布

Miyagawa(2012)によると、日本語の丁寧形「ます」は Emonds(1969)の意味での真の主文現象であり、主文か引用節にしか生起できず、左端部のテンプレートの中でも一番上に位置する

Speech Act Phrase 内での Agreement によって認可されるとしている。しかし、Harada(1976)、仁田(1991)、Uchibori(2007,2008)等の先行研究を紐解くと、主文や引用節以外でも「ます」が生起可能であることがわかる。

(5) 出身地や居住年数を考えまして、アンケート・カードを二百は集めようと思っています。
(6) ～芭蕉の門人の服部土芳が書き残しました『三冊子』という書物に、芭蕉についてのエピソードで、つぎのような話があります。
(7) 「その少年というのは？」
「署に移しました。人目がふえましたので……」 (仁田 1991:189-190)

上記の例文が示すように、「ます」はテンスが生起しない「～シテ」節や、関係節、理由節等においても生起できる。また、Uchibori (2007, 2008)は、補文内の「ます」は主節にも「ます」がある場合にのみ生起可能であると述べている。もしそうであれば、補文内に Speech Act Phrase が存在する必要がなく、主節の Speech Act Phrase から節境界を超えて補文内の「ます」が認可される、と考えることもできる。

本研究では、主節に「ます」が存在するという前提条件のもと、「ます」が生起できる補文がどのようなものか考察した。日本語学の先行研究では、「思う」等の心内発話動詞が導く、聞き手が不在の発話内で「ます」が生起しにくいと観察されている。本研究では統語論の観点から各補文のタイプとその統語的な特性を洗い出し、Chomsky(2000)の言うフェイズを形成する補文においては「ます」は生起できないが、フェイズを形成しない叙実節や subjunctive 節においては「ます」の生起は比較的容認される傾向にあることを確認し、主節の Speech Act Phrase からフェイズ境界を超えて「ます」を認可することができないと主張した。

また、(6)のように関係節内に「ます」が生起する場合、非制限用法の解釈になるという Harada (1976)の直感を再検証した。日本語においても、制限用法の関係節内では演算子の移動があり、非制限用法の場合はその移動がないとの Ishii(1991)の分析に基づき、補文内で演算子の移動がある場合とない場合で「ます」の容認度に差があるかを検証したところ、ない場合の方が容認度が高かった。よって、少なくとも補文内の「ます」の生起は Speech Act Phrase という句構造に依拠しておらず、主節に「ます」が生起し得る文であれば生起可能であるが、主節の「ます」からの認可においてフェイズや演算子による制約を受けると考えられる。

具体的な成果として、関西言語学会の Proceedings に論文『On (Non-)roothood of the Japanese Politeness Marker -Mas-』を発表するとともに、国際基督教大学で開催された 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics において「On Long-distance Licensing of the Japanese Politeness Marker -Mas-」という題目のポスター発表を共同で行った。また、その発表内容の一部を、MIT Working Papers of Linguistics 88 号に『On Conditions for the Duplication of the Japanese Politeness Marker -Mas-』という論文として発表した。

（2）タイプ C 補文内における演算子の移動

二年次には、Hooper and Thompson (1973)のタイプ C 補文について分析した。Hooper and Thompson (1973)は、補文をその意味に基づき 5 つのタイプに分けており、そのうちタイプ C と D では主文現象が容認されないと考察している。

Nonfactive			Factive	
A	B	C	D	E
say	suppose	be (un)likely	resent	realize
report	believe	be (im)possible	regret	learn
exclaim	think	deny	be surprised	know
etc.	etc.	etc.	etc.	etc.

(8) Hooper and Thompson (1973)の補文の分類

主文現象が容認されないタイプ D の factive (叙実節)については、これまで多くの論考があり、叙実節が regret the fact のように名詞節を選択できること、また弱い島であることから、演算子の移動を伴うと考えられてきた。しかし、タイプ C 補文に関する論考は少なく、またタイプ C 補文は意味的に叙実ではないことから、叙実の意味的性質を演算子と結びつける分析では、なぜタイプ C 補文で主文現象が容認されないのか十分に説明できない。

本研究では、弱い島のテストをタイプ C 補文にも行い、タイプ C 補文が叙実節のタイプ D 補文と同様の振る舞いをすることを観察した。

(9) a. It is likely that Bill met Kate.

b. Who$_i$ is it likely that Bill met t_i?
c. Which article$_i$ is it likely that she selected t_i?
d. *Who$_i$ is it likely t_i met Kate?
e. *How$_i$ is it likely that his son fixed the car t_i?

この観察から、タイプ C 補文にも演算子の移動があると結論づけ、叙実の意味の実現のために演算子が移動するわけではないことを示した。

具体的な成果として、Osaka Literary Review 57 号に『On the Left Periphery of the Complements of Type C Predicates』というタイトルの論文を発表した。

（３）英語の左方転移と話題化の分布

介在分析では、２つの要素の移動が起こり、片方の移動（話題化）がもう一方の移動（演算子）の移動を妨げるとしている。話題化と似た左方転移は、元位置に代名詞が残る構文であるが、島の制約に違反しないため、移動を伴わないことが知られている(Chomsky 1977)。一方で、左方転移はタイプ C とタイプ D 補文内には生起できないことが知られており、Miyagawa (2017)が介在分析ではなく切り詰め分析を支持する根拠となっている。しかし、Miyagawa (2017)ではすべての補文のタイプにおいて検証しているわけではなく、左方転移と話題化の分布を精査する必要がある。

本研究では、補文のタイプをタイプ A、タイプ B&E、タイプ C&D の３つのグループにわけ、それぞれのグループで左方転移と話題化が容認されるか否か検証した。

(10) a. The teacher said that this book, many students had read for the assignment. （タイプ A, 話題化）
b. The teacher said that this book, many students had read it for the assignment. (タイプ A, 左方転移)
(11) a. The teacher believed that this book, many students had read for the assignment. (タイプ B&E, 話題化)
b. The teacher believed that this book, many students had read it for the assignment. (タイプ B&E, 左方転移)
(12) a. The teacher regretted that this book, many students had read for the assignment. (タイプ C&D, 話題化)
b. The teacher regretted that this book, many students had read it for the assignment. (タイプ C&D, 話題化)

実験に際しては、クラウドソーシングサービス Amazon Mechanical Turk (MTurk)上で 113 人の英語母語話者の被験者を募り、実験プラットフォーム・ウェブサイト Ibex Farm で 7 件法のリッカート尺度による容認性判断テストを行い、例文が擬似ランダム提示された。それぞれの容認度の平均値と標準偏差は以下の通りである。

	平均値	標準偏差
タイプ A, 話題化	4.848333	1.567192
タイプ A, 左方転移	4.82	1.557233
タイプ B&E, 話題化	4.845	1.59851
タイプ B&E, 左方転移	4.853333	1.622614
タイプ C&D, 話題化	na	na
タイプ C&D, 左方転移	4.858333	1.614293

(13) 補文のタイプ別話題化と左方転移の容認度 (n=113)

実験上のミスにより「タイプ C&D, 話題化」のデータが欠落しており完全な比較をすることはできなかったが、その他のタイプ間、話題化と左方転移間に有意な差は見られなかった。しかし、個々の被験者のデータを観察した結果、7 件法の尺度の一部分しか使っていなかったり、bad filler と good filler の判断が適切ではない被験者が少なくない数存在し、それが結果に影響を与えた可能性は否定できない。本実験はもう一つの実験と組み合わせて行ったため、実験が長すぎたことが大きな原因であると考えられる。この失敗を活かして、今後もう一度実験計画を練り直し、左方転移のような移動を伴わない主文現象と演算子の移動がどう関わっているか再度検証する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Keisuke Yoshimoto	４．巻 88
２．論文標題 On Conditions for the Duplication of the Japanese Politeness Marker -Mas-	５．発行年 2018年
３．雑誌名 MIT Working Papers in Linguistics	６．最初と最後の頁 465-470
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Keisuke Yoshimoto	４．巻 57
２．論文標題 On the Left Periphery of the Complements of Type C Predicates	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Osaka Literary Review	６．最初と最後の頁 67-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Keisuke Yoshimoto	４．巻 37
２．論文標題 On (Non-)roothood of the Japanese Politeness Marker -Mas-	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Proceedings of the Forty-first Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society	６．最初と最後の頁 229-240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Keisuke Yoshimoto and Norio Nasu
２．発表標題 On Long-distance Licensing of the Japanese Politeness Marker -Mas-
３．学会等名 The 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考